

高田 和男

医療への警鐘を鳴らし続ける、日テレ史上初のプロパー客員解説委員

文 高橋 誠

Text by Mac Takahashi

・ 学校法人慈恵大学広報推進室長
・ 医療・健康コミュニケーター

医療ジャーナリストでもある日本テレビ報道局客員解説委員の高田和男氏（国立国際医療研究センター顧問）は、医療情報番組「からだ元気科」（1997～2006年放送）など統括した番組に出演した約500人にのぼるドクターとの交流を深めてきました。番組終了後も、医師が直面する課題解決のため「メディア側として何ができるか」が高田氏のラ



昨年10月の祭日、東京・汐留の日テレホールで開催された「アンパンマン祭り」をお孫さんと観劇後、報道局「news every」のスタジオにて。お孫さんの健康と成長を見守りながら、いわゆる2025年、2040年問題を迎える医療環境の変化に、湘南藤沢に住む高田氏は日夜思いをはせる。

イフワークとなりました。

2009年1月、日本の医療問題を考える戦略的勉強会「高田塾」が、氏家齋一郎日本テレビ放送網代表取締役会長の支援で発足しました。2カ月毎に日本プレスセンターに塾生600人中、約70人の精鋭が集まり、5月で56回目を迎えます。当該分野の第一線で活躍する医師、

研究者、政治家、行政官、財界人など、メディア出身塾長ならではのバラエティに富んだ選りすぐりの演者が、課題の抜本的解決を図るための具体的な提言を本音で語った後、高田塾長のミッションに共鳴した同局・井田由美アナの司会で活発な質疑応答が交わされます。良質な医療の実現に向けた、この重要な任務の推進役として、高田氏は局から初の「客員解説委員」の肩書を与えられています[※]。

医療界とメディアに、客観的視点で警鐘

日本の外科医療は胃がんや肺がん、心臓病などの手術成績が圧倒的に優れ、これが世界最長の平均寿命に大きく貢献しています。しかし日本外科学会顧問でもある高田氏は、「厳しい勤務時間、それに見合わぬ低賃金や高難度手術に伴うハイリスク等の理由から若手医師は外科医を敬遠しており、この状態が続けば地域の病院ばかりでなく日本に外科医が1人もいなくなる」とかねてから警鐘を鳴らしてきました。メディアの立場では「一

面的で過度な医療バッシングは社会の不利益」と客観的視点で医療報道の暴走を戒めます。朴訥な語り口と「はじめまして、ここが高田塾ですか」と会場に現れる、人を食ったような茶目っ気が人格に味わいを添え、対立する人々の両論を懐深く受け止めます。豪華で多彩な人脈が、高田元三郎元毎日新聞主幹を父に持つ出自に立体感を与える、余人に代えがたい、自称「湘南の無頼人」です。

（*注）日本テレビは外部からの招聘者に客員解説委員を付与するため、局内定年者の高田氏はレアケース。



Profile

学校法人慈恵大学広報推進室長。医療・健康コミュニケーター。東京生まれ横浜育ち。慶応義塾大学経済学部卒。ミスノ広報宣伝部、リクルート広報企画部、米国SPBC社New Design Conceptor（LA在住12年）、仙生露Executive PR Adviser、富士1ばんゴルフ副支配人/経営企画室長/広報室長を経て、2004年より現職。日米複数企業における広報・マーケティング経験から、難解な医療・健康をわかりやすくメディア・社会に伝えるべく、病院広報担当者間の勉強会「病院広報研究会」を立ち上げ、医療・健康コミュニケーション活動を研究中。趣味はゴルフ（Hdcp9）、ワイン（日本ソムリエ協会ワインエキスパート#58）。